

生物生産学部

教官と学生の二二脚

平成六年度生物生産学部実行委員会

手

探り状態であった前年度を引き継いだ今年の実行委員会は、学部オリキャンの基盤作りを中心に運営された。

キャンの目標は、「教官と新入生、先輩と新入生、新入生同士のコミュニケーションを図る」ことに絞り、入学式直後に行われたオリエンテーション行事とは重複を避け、新入生の顔を生き生きさせることに主眼をおいた。だから皆の顔が明るく紅潮したとき、どれほど嬉しかったことか。



▲雨にも負けず……

委員会の苦労といえば、それは雨天対策につぎ。委員会でも何回議論しても結論が出なかったことが現実となっていました。しかしキャン場を下見したときの私の判断は「実行できる」であり、前日まで何度も聞きに来る学生に「雨天実行」を言った。理由はテントが高床であり、炊事場に屋根があり、体育館があったからである。当日豪雨の中を大学に駆けつけてみると、すでに熱気があふれ、誰も中止を口にしなかった。

オリキャンが長続きするためには、学生のネットワークを縦に構成しなければならぬ。そこで委員会の拡大を重ね、二年生から四年生まで万遍なく参加して貰うことにした。結果は成功。なぜなら来年の実行委員を希望する学生がもういるのだから。

そして今オリキャンのノウハウを盛り込んだ記録作りが進行している。これがあればもう心配はない（かどうか？）。

（実行委員長 太田安英）

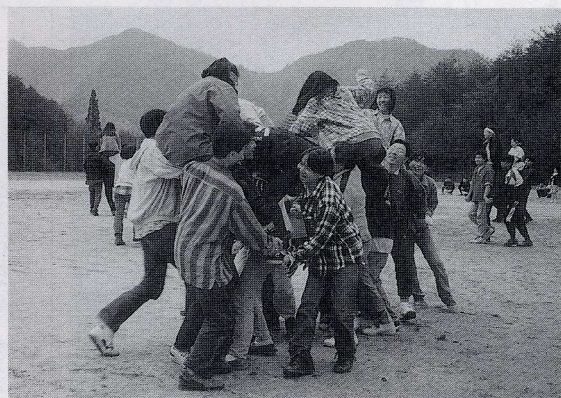
オリキャンの成功はオリキャンまでの準備期間!?

今

回のオリキャンで大きく変わったのは、一週間の『準備期間』を取り入れたことである。なぜ、この一週間が必要なのであろうか。それは、当日見知らぬもの同士を同じ班にして一泊二日を過ごしてもお互いに打ち解け合いくい（アルコールぬきの状態で）のではという観点から考えられた。

しかしながら、準備期間ではフェローしかリーダー役がおらず、その班をどこまで引張れるかという不安もあったが、ある時はフェロー同士がさまざまなアイデアを出し数々の企画を実施し、またある時はフェロー自身の班をまとめ、料理を決めたり、コスチュームを決めたりと積極的で、不安というものはない思い過ごしてあった。その結果、準備期間の間に新入生同士だけでなく先輩、教官とのつながりが生まれ、オリキャン本番での爆発的な盛り上がり、そしてあのキャンドルファイヤーの感動の涙につながったと思う。

我が学部では、二日目に『手紙で寄せ書き』を企画したが、その一部を紹介すると、「二週間本当にありがとう。おかげで友人、先輩がいっぱいできた」「初めて会ったとは思えないほど仲良くなれた」「オリキャンが終わった後もぜひ集まろう」「味わったことの無い経



▲二日目は晴れ、女の戦い

験をいっばいさせてもらった」「最高のオリキャンであった。心に残る場面を作ってくれてありがとう」など喜びの手紙がほとんどであった。これは準備期間を意義づけているだけでなく、精一杯やってくれたフェローの努力も見逃せないであろう。

最後に、今回はかなりの試行錯誤を繰り返したが、これをベースに来年以降はこれ以上のものを作り上げてほしい。そして、また全学部で行える日がくることを切に願っている。今回のオリキャンにご協力下さった教職員及び学生の皆様お忙しい中本当にありがとうございます（学生代表 峰 浩司）